

藤原氏の阿津賀志山防塁と城氏関連の陣が峯城跡

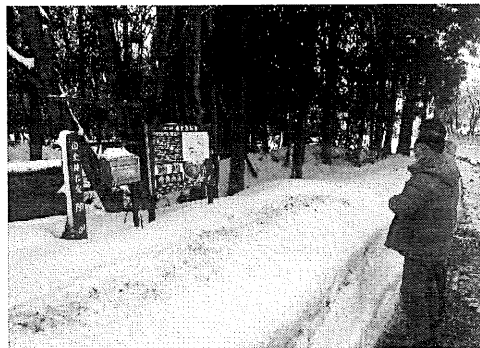
公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 佐藤 俊

1. 城氏関連の陣が峯城跡

(1) 要 項

所在地 福島県河沼郡会津坂下町大字宇内

調査履歴 陣が峯城跡は、文化6年(1809年)に会津藩が編纂した地誌『新編会津風土記』に、城四郎長茂が築いた館のひとつとして記載があり、江戸時代には城館として知られていたようである。現在でも地元住民は陣が峯城跡を、「じょうのしろ」と呼んでいる(吉田 2017)。1987年には大竹四郎氏により須恵器系陶器片が採集されたことから遺跡として周知される。2000



陣が峯城跡近景

年には表面採集が行われ、遺跡内北側の祠付近から輸入陶磁器や中世陶器が採集された。これを契機として、保存を目的とした範囲内容確認調査が2002年～2006年にかけて行われた。現在までに発掘調査された面積は2,239 m²に及ぶ。2007年には国指定史跡となり、出土遺物は2010年に「陣が峯城跡出土品」として福島県指定重要文化財に指定された。

遺跡の評価 陣が峯城跡は九条兼美の日記『玉葉』の、養和元年(1181)七月一日の記事にある越後守城四郎長茂が横田河原で木曾義仲に敗れ、籠ろうとした「藍津之城」の可能性が指摘されている。八重樫忠郎氏は、陣が峯城跡の出土遺物からみた存続年代が12世紀第1四半期～第3四半期に限定されることからこれを疑問視している。また、陣が峯城跡の主について、撰関家から荘園の管理の委託を受けた在地の豪族、城氏と指摘している(八重樫 2007)。

周辺地域の概況 陣が峯城跡の所在する会津坂下町は、12世紀前半には藤原撰関家領会津燧河荘の域内に位置していたとみられる。陣が峯城跡の西方の丘陵上には雷神山経塚が位置している。雷神山経塚からは渥美灰釉壺が出土しており、八重樫忠郎氏は12世紀第2四半期の渥美大アラコ窯製品と指摘している(八重樫 2007)。近年では陣が峯城跡の西方、高寺山の山稜に位置する高寺山遺跡が発掘調査され、8世紀末～9世紀にかけての古代山岳寺院の様相が明らかになった(吉田 2019)。薬王寺遺跡では、発掘調査の成果から池跡を伴う寺院跡が確認され、浄土庭園と想定されている。遺跡の盛期は12世紀前半から中頃にあり、遺構や遺物の特徴について陣が峯城跡と類似点があると指摘されている(渡部 2017)。

(2) 遺跡の概要

立 地 陣が峯城跡は、会津盆地の西端、高寺山から連なる山塊の東端に位置する。勝負沢が形成した標高約195mの扇状地上に立地し、北側は阿賀川の氾濫原、西側は雷神山に連なる丘陵が位置し、東側は旧宮川(鶴沼川)の浸食により形成された比高差約20mの段丘崖となる。

遺 構 陣が峯城跡の構造は北側・西側・南側の三方を堀跡、一部は土塁で、東側は自然の段丘崖により区画して、その内側には平面形が不整な隅丸五角形の平場（平場1）を築いている。城館の規模は東西約110m、南北約140mである。

平場1の範囲からは掘立柱建物跡6棟や鍛冶炉1基などが確認されている。中でも第3号掘立柱建物跡は5間×2間の身舎の四面に廂が付属しており、「政庁的な建物」と指摘されている。第5号掘立柱建物跡からは、カマドは検出されていないが、炭化した木製の椀・盤や多量の炭化米・包飯・穀類が出土しており「^{くりや}厨」と想定されている。

平場1の南側は遺構や遺物が希薄となり、広範囲に硬く締まった整地層が認められることから、広場としての機能が想定されている。

堀跡は内堀跡と外堀跡の二重で構成され、勝負沢の浸食を利用して堀とした部分と、人為的に掘られた部分がある。どちらの堀跡も西側が狭く、南北に向かうにつれ幅と深さが大きくなり、北側の堀跡と平場1との比高差は約15mとなる。断面形は逆台形を基調とする。規模は外堀跡で上端幅7～30m、底面幅2～10m、深さ2.9m、内堀跡で上端幅10～29m、底面幅1～3m、深さ4.2mである。内堀跡の西側中段には、「テラス状の張り出し部」が確認されている。また、外堀跡と内堀跡の間には一部で、細長い平場が形成されている（平場2）。

土塁は2か所で確認されている（土塁1・2）。土塁1は平場1の西隅部と内堀跡の間に構築されている。南側は明確な高まりが確認できるが、北側に向かうにしたがい曖昧になる。規模は現況で長さ70m、幅は6～9m、高さ1～2.5m、基底部幅5.2m、頂部幅2mである。土塁は内堀を掘り上げた土砂を用いて構築されたとみられ、版築は行われていない。土塁2は外堀跡の西側に位置する。現況での測量調査のみ行われており、構築方法などは不明である。規模は現況で長さ約25m、幅約5m、高さ約2mとなる。

柵列について、土塁1を断ち割ったところ、内堀跡寄りの頂上部から計3基の「柱穴状の掘り込みないし打ち込まれたものの抜き取り痕」が確認されていることから、報告書中では土塁頂部に「柵や旗立ての支柱などの施設」が存在した可能性を指摘している。規模は径約15～25cm、深さ約35～70cmである。堆積土はいずれも黒褐色土の単層で、黒色土を斑点状に含み、あるいは灰黄褐色土、礫、炭化物を含む。堆積土の特徴から、柱を抜いた後に埋め戻しを行っていると思われる。注目したいのは、柱穴の検出面が05と06の2面となり、重複関係も認められる点で、土塁が完成した後、複数回の積み直しや柱の付け替えが行われたと推測される。また、外堀跡と内堀跡の間に挟まれた平場2で「柱穴と考えられるピット」1基が確認されている。平面形は円形で径は約60cmである。断面の半裁などは行われておらず、深さは不明である（吉田ほか2005）。

遺 物 輸入陶磁器（白磁の皿・碗・四耳壺・水注、青白磁の輪花皿、青磁の碗、高麗青磁）、国産中世陶器（須恵器系陶器、瓷器系陶器）、ロクロかわらけなどが出土している。遺物の年代は12世紀第1四半期～第3四半期を主体とする。飯村均氏によれば、輸入陶磁は白磁の出土量が圧倒的に多く、特に碗・皿が多く平泉町柳之御所遺跡の出土状況が異なるとのことである（飯村2017）。八重樫忠郎氏は平泉セット（かわらけ、常滑や渥美や須恵器系陶器の壺甕、白磁壺のセット）の分布を考察した際、陣が峯城跡からはロクロかわらけ、白磁四耳壺、常滑大甕の完全な平泉セットが

出土しているが、手づくねかわらけが無い点、年代が12世紀前半に位置付けられている点、輸入陶磁器が日本海側の流通により持ち込まれている点から、平泉藤原氏との関係はないと指摘している（八重樫2019）。

2. 藤原氏の阿津賀志防塁

(1) 要 項

所在地 福島県伊達郡国見町大字大木戸・石母田・森山・大枝

調査履歴 阿津賀志山防塁の存在は江戸時代には認識されており、文久元年（1861）の『西大窪村絵図』には「二重堀」の名称で描かれている。1970年に国見町指定史跡となる。1971年には東北自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、3重の土塁と2重の堀跡が確認された。1979年には「伊達西部地区圃場整備」に伴い発掘調査が行われ、同年に国指定史跡となるが、指定範囲は遺跡全体の約36%に留まった。国見町教育委員会は2008年以降、史跡の指定範囲追加を目指し、継続的な範囲・構造を確認する発掘調査を行い、2022年には2,372㎡の追加指定が答申された（文化庁文化財第二課2022）。



阿津賀志山防塁近景（下二重堀地区）

吾妻鏡の記載 文治五年（1189）の阿津賀志山防塁に関連した記載について入間田宣夫氏の論考を参考にすると、藤原泰衡は、「二品（源頼朝）の発向（出陣）のことを聞き」、「阿津賀志山に城壁を築き要害を固め、国見宿と彼の山との中間に、俄かに口五丈（約15m）の堀を構えて、^{ちがくまわ}逢隈河の流れを堰入れて柵とした」としている（入間田1994）。

8月7日に源頼朝率いる鎌倉方の軍が国見駅に到着。深夜に鎌倉方畠山重忠の部隊が防塁突破のための工作を行う。「重忠は率いてきた人夫八十人を召し、用意していた鋤・鍬で土砂を運ばせ、かの堀を塞いだので、まったく人馬の障害がなかった。」

8月8日には阿津賀志山防塁を守る平泉方の金剛別当秀綱と鎌倉方の畠山重忠・小山朝光・加藤景廉・工藤行光・工藤祐光らにより戦闘が開始。攻防の末、秀綱の陣が攻められ、阿津賀志山防塁は破られる。

周辺地域の概況 阿津賀志山防塁の所在する国見町は、11世紀ころ信夫郡より分立した伊達郡に属していたとみられる。近年では、伊達郡内で相馬福島道路建設に伴い中世前期の遺跡が発掘調査されている。桑折町新宿遺跡では、片側に側溝を持つ幅約8mの道跡が確認され、「奥大道」と指摘されている（廣川2018）。年代について遺跡内から3型式の東北諸窯産壺が出土していることから、道跡は12世紀第4四半期には機能していた可能性がある。伊達市荒屋敷遺跡は、倉庫とみられる方形竪穴建物跡や掘立柱建物跡が確認されており、阿武隈川東岸に面した川湊とみられる（丹治2020）。川湊の機能した年代は出土遺物の特徴から、12世紀後半～14世紀前半とみられる。霊山は、

阿武隈高地頂部に広範囲に伽藍を有する平安時代から南北朝期にかけての山林寺院である。12世紀中頃から後半の輸入陶磁器の白磁碗や飯坂窯跡群産とみられる須恵器系陶器甕が採集されており、当該時期に寺院が機能していたことが明らかとなっている（佐藤・石本・藤沼 2022）。

(2) 遺跡の概要

立地 阿津賀志山防塁は、信達盆地の北端、奥羽山脈から連なる丘陵と阿武隈川の間位置する。この付近には東山道、奥大道が位置していたと想定されており、現在でも国道4号線、東北自動車道、JR東北本線・新幹線、東北電力の主要電線がある。阿津賀志山防塁は、地形的にこの丘陵と河川間の狭隘部を通過しなければこれより北に進むことができない重要な場所に立地していると評価できる。

阿津賀志山防塁は標高289mの厚樫山（阿津賀志山）から阿武隈川の氾濫域にかけて構築されている。地形分類図を参考にすると丘陵（厚樫山）から砂礫段丘、阿武隈川に形成を由来する自然堤防上に立地している。阿津賀志山防塁の西側には沿うように滑川^{なめりかわ}が阿武隈川に向かって流れており、一部は湿地となる。阿津賀志山防塁は滑川や湿地、河川により形成された段丘の高低差により防御機能を高めていることが指摘されている。

遺構 阿津賀志山防塁は北西-南東方向に延伸し、その距離は約3.2kmとなる。遺構が長大なため、便宜上区域名が付されており、北端から「山頂地区」、「二重堀始点地区」、「国道4号北側地区」、「東国見・西国見地区」、「国見内地区」、「遠矢崎地区^{とおやざき}」、「大久保地区」、「赤穂地区」、「高橋地区」、「大橋地区」、「下入ノ内・原前道下地区^{しもふたえぼり}」、「下二重堀地区」、「欠下地区」と呼称している。

阿津賀志山防塁の基本的な構造は2条の堀跡とその際に敷設される3条の土塁が特徴で、便宜上、堀跡について平泉側（東側）から「内堀」、「外堀」、土塁について「内土塁」、「中土塁」、「外土塁」と呼称している。阿津賀志山防塁は発掘調査の結果、二重堀が徹底して構築されるわけではなく、「遠矢崎地区」、から「赤穂地区」の一部は1条の堀跡、「国道4号北側地区～東国見地区」、「国見内地区」、「赤穂地区」、「高橋地区」、「下二重地区」では2条の堀跡となる。安田稔氏によれば、阿津賀志山防塁の特徴として①堀は西側に比べ東側の立ち上がり急傾斜である。②内土塁が高く、外土塁が低い。③平地に近い部分では堀幅を広くとる。④土塁は版築による構築法を採る（下二重堀地区を除く）。としている（安田 2018）。阿津賀志山防塁の規模は、すべての土塁・堀跡を含めた幅は15.91m～24.86m、堀底から土塁頂部までの高低差は約4mである。外堀跡は上端幅で3～10.3m、下端幅で0.5～3.4mである。内堀跡は上端幅で6.84～13m、下端幅で1.3～2.6mである。堀跡の深さについて、遺存の良好な下二重堀地区の遺構でみると、外堀跡で2.35m、3.4m、内堀跡で1.25m、3.05mである。

柵列に関連する遺構について現在まで確認されていない。参考ではあるが、「国道4号北側地区」で土塁直上から柱穴状の掘り込み1基が検出されている（SK38）。規模は直径約90cm、深さ約120cmである。

また、吾妻鏡では阿武隈川の水を引き入れていたという記載があることから、下二重堀地区外堀の底面堆積土（08）について珪藻分析が行われている。08では珪藻化石が少ない点や陸生珪藻A群が多いことから陸域環境が考えられており（安田 2020）、下二重堀地区において、阿武隈川から

堀へ水を引き入れていた可能性は低いようである。

八重樫忠郎氏は阿津賀志山の「二重堀」について、鳥海柵遺跡から大鳥井山遺跡、柳之御所遺跡と成長してきた「武士団館の象徴」とし、「陸奥と出羽の武士団のアイデンティティそのもの」と評価している（八重樫 2015）。

遺物 阿津賀志山防塁の発掘調査では、古墳時代中期から後期の土器や奈良・平安時代の須恵器・土師器などが出土しているが、中世期、12世紀後半の遺物は出土していない。継続的な発掘調査を行って、土塁の積土や堀跡の堆積土に全く中世期の遺物が含まれないことについて、阿津賀志山防塁が文治五年の合戦時に際して急造され、合戦後もその場を積極的に使用しなかった可能性がある。なお、遺構の構築年代を探るため赤穂地区堀跡最下層の炭化物1点についてAMS年代測定を試みたところ、11世紀～12世紀前半の年代が得られている（木本・大栗 2012）。

今野賀章は、阿津賀志山防塁以南の信夫庄司佐藤氏の領域とされる伊達郡内において遺跡から平泉で多く出土している手づくねかわらけが出土していないことから、阿津賀志山が平泉藤原氏の南の境界ラインを反映したものと評価している（今野 2017）。

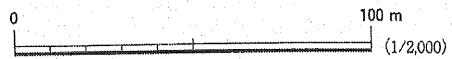
引用参考文献

- 飯村 均 2017 「陣が峯城」『東北の名城を歩く 南東北編』吉川弘文館
- 入間田宣夫 1994 「第3章第2節阿津賀志山防塁と文治合戦」『国指定史跡 阿津賀志山防塁保存管理計画報告書』国見町教育委員会
- 木本元治・大栗行貴 2012 『阿津賀志山防塁史跡指定調査概報4・他』国見町教育委員会
- 木本元治・大栗行貴 2015 『阿津賀志山防塁史跡指定調査報告書』国見町教育委員会
- 今野賀章 2017 「阿津賀志山防塁」『東北の名城を歩く 南東北編』吉川弘文館
- 佐藤 俊・石本弘・藤沼邦彦 2022 「史跡及び名勝霊山山頂伽藍群の表面採集資料について」『伊達市保原歴史文化資料館紀要』第4集 伊達市教育委員会
- 丹治篤嘉 2020 「荒屋敷遺跡」『一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告8』福島県教育委員会、(公財)福島県文化振興財団
- 廣川紀子 2018 「新宿遺跡」『一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告6』福島県教育委員会、(公財)福島県文化振興財団
- 文化庁文化財第二課 2022 『月刊文化財 令和4年9月号』第一法規株式会社
- 八重樫忠郎 2007 「陶磁器が語る陣が峯城跡」『御館の時代 十二世紀の越後・会津・奥羽』高志書院
- 八重樫忠郎 2015 「阿津賀志山の二重堀」『平泉の光芒』東北の中世史1 吉川弘文館
- 八重樫忠郎 2019 「第IV部都市空間と掌握領域 第2章平泉藤原氏と領域の掌握」『平泉の考古学』東北中世史叢書2 高志書院
- 安田 稔 2018 『阿津賀志山防塁史跡整備調査概報3ほか阿津賀志山防塁（第21次調査）—下二重堀地区—』国見町教育委員会
- 安田 稔 2020 『阿津賀志山防塁史跡整備調査概報4ほか阿津賀志山防塁（第23・24次調査）—下二重堀地区—』国見町教育委員会
- 安田 稔 2022 『阿津賀志山防塁史跡整備調査概報6ほか 阿津賀志山防塁（第26次調査）—東・西国見地区—』国見町教育委員会
- 吉田博行ほか 2005 『陣が峯城跡 町内遺跡（陣が峯城跡）範囲内容確認調査報告書1』福島県河沼郡会津坂下町教育委員会
- 吉田博行ほか 2008 『陣が峯城跡 町内遺跡（陣が峯城跡・周辺遺跡）範囲内容確認調査報告書2』会津坂下町教育委員会
- 吉田博行 2017 「陣が峯城跡」『会津坂下町史 第四巻』会津坂下町
- 吉田博行 2019 「高寺山遺跡」『令和元年度福島県考古学会第61回大会発表要旨』福島県考古学会
- 渡部智子 2017 「菓王寺遺跡」『会津坂下町史 第四巻』会津坂下町

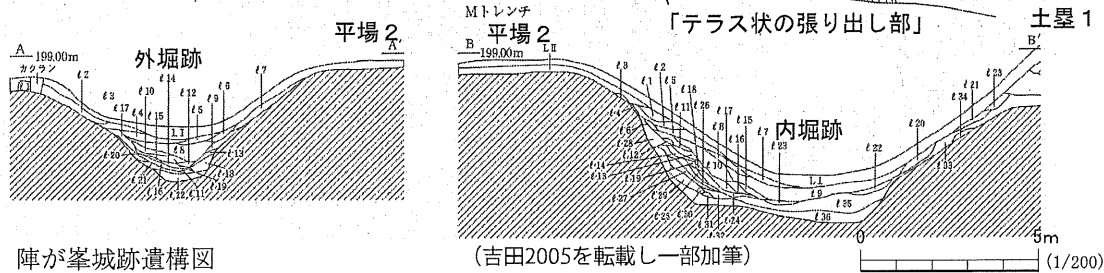
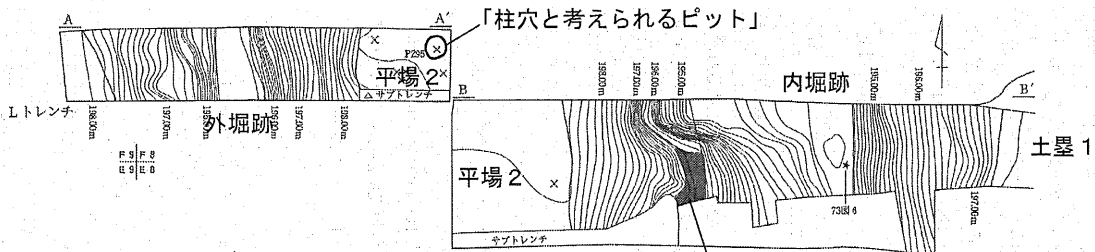
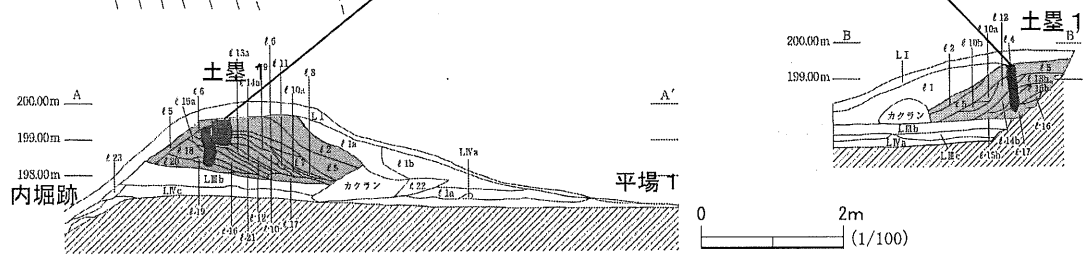
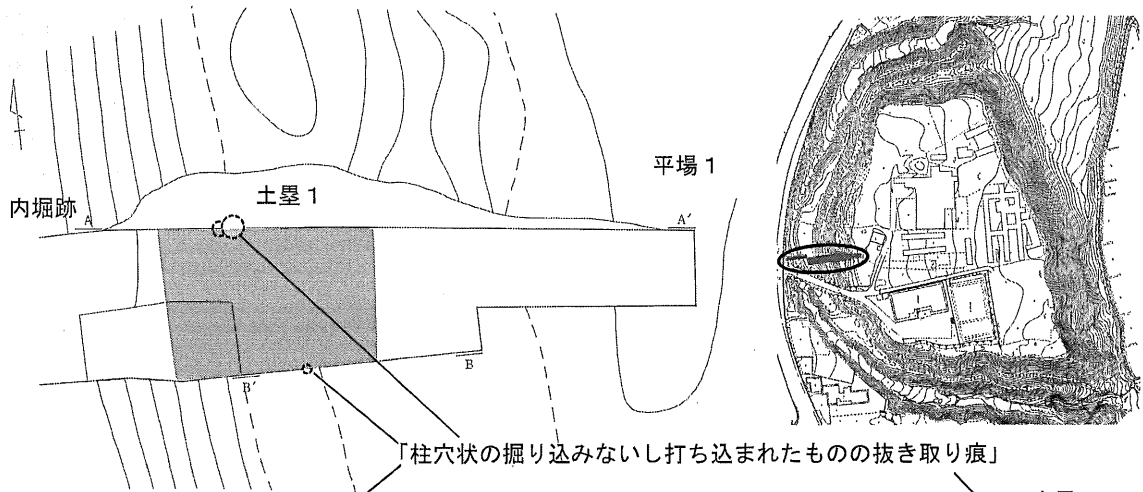
●阿津賀志山防塁について、当時調査担当者であった大栗行貴さんから多くのご教示を頂きました。●



(吉田ほか2005を転載し一部加筆)

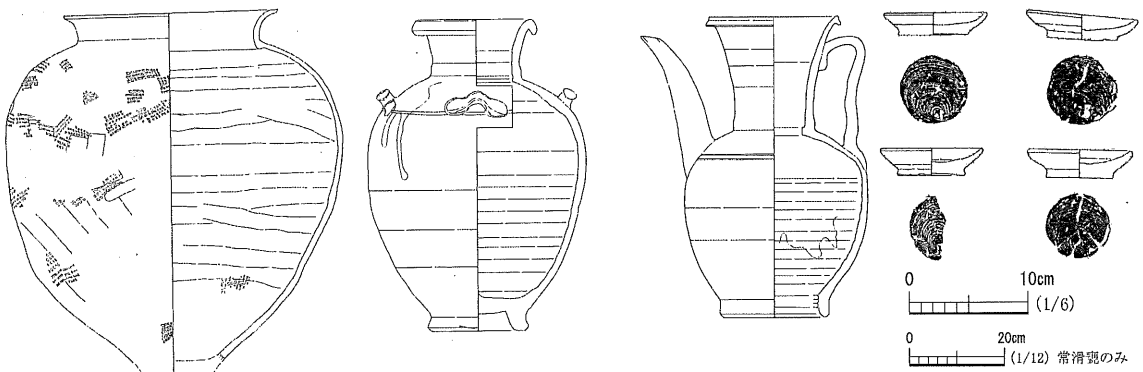


陣が峯城跡全体図

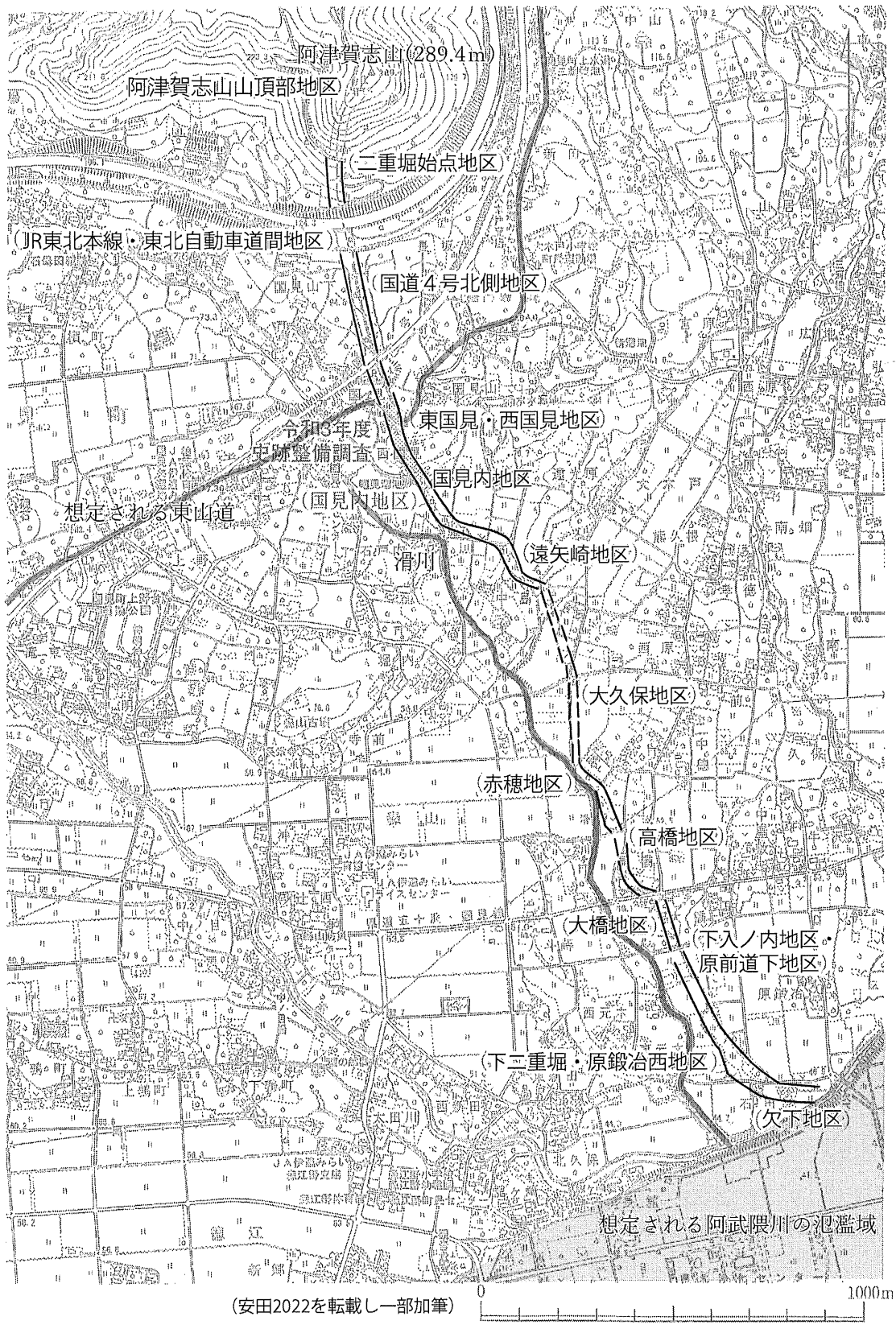


陣が峯城跡遺構図

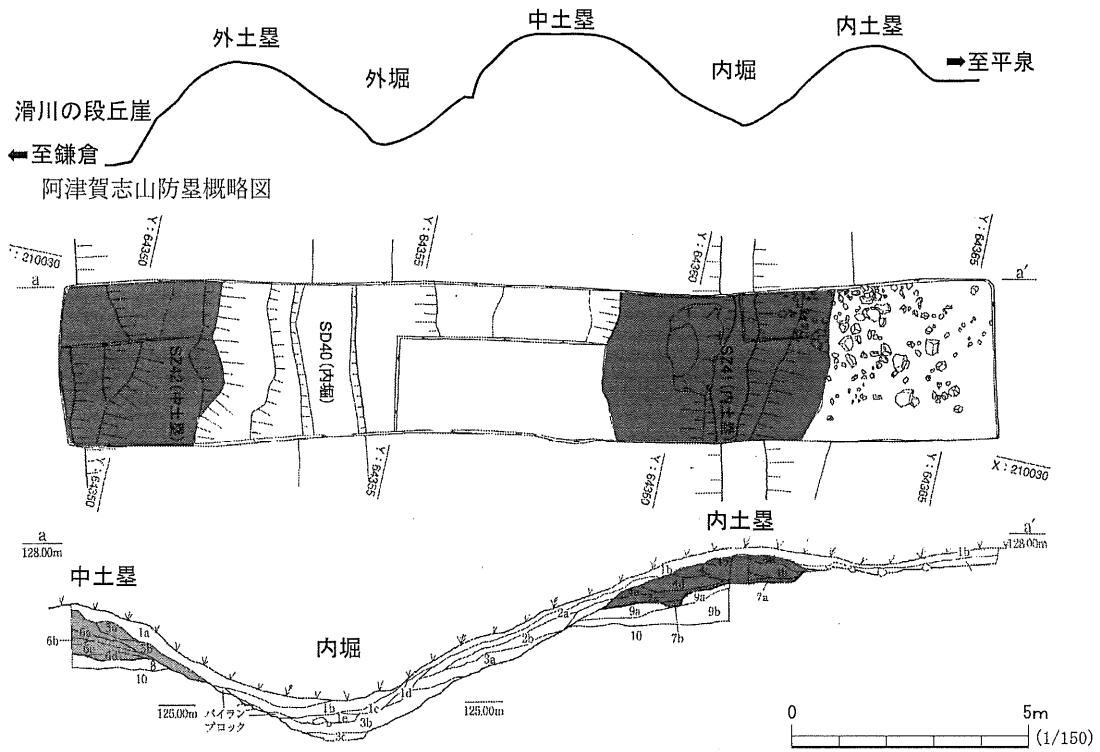
(吉田2005を転載し一部加筆)



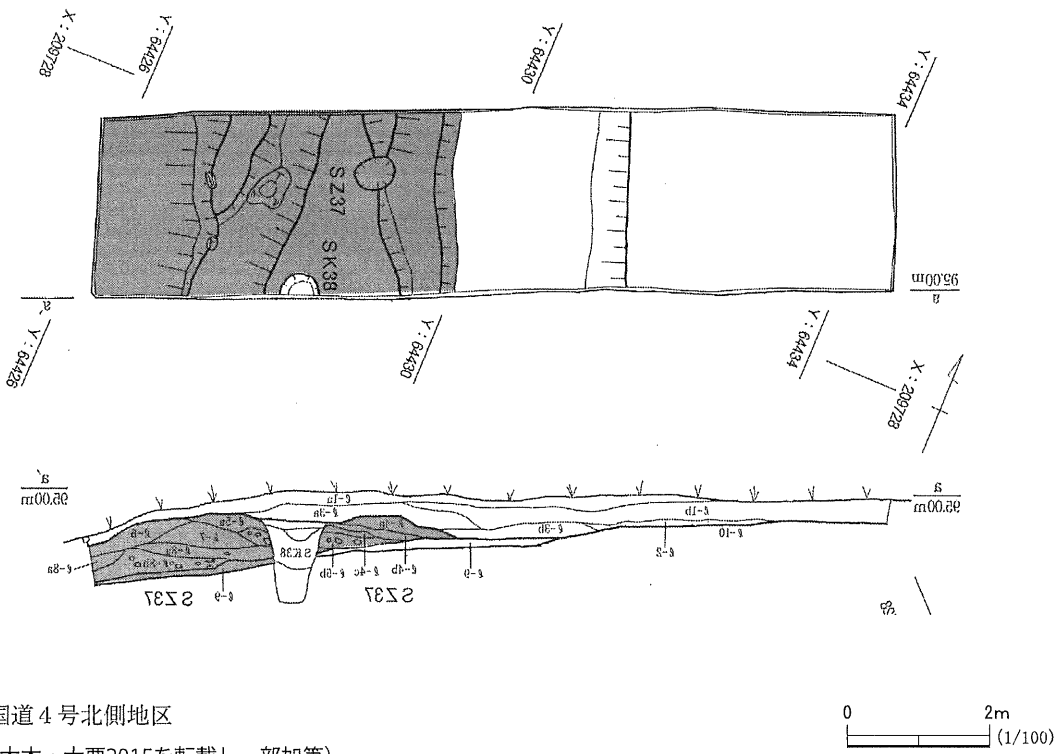
陣が峯城跡から出土した常滑甕、白磁四耳壺・水柱、ロクロ成形かわらけ



阿津賀志山防壘全体図



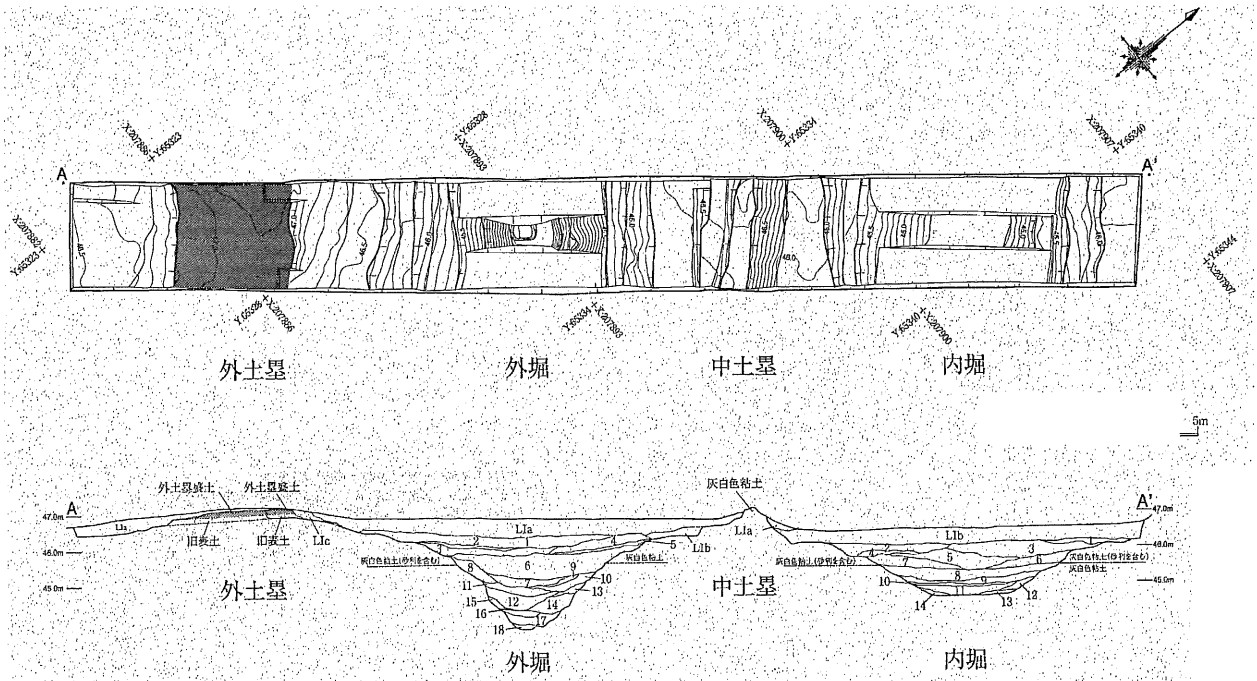
JR東北本線・東北縦貫自動車道間地区
(木本・大栗2015を転載し一部加筆)



国道4号北側地区
(木本・大栗2015を転載し一部加筆)
阿津賀志山防塁遺構図

地区	土塁・空堀 トレンチ	外土塁 (A)			外堀 (B)			中央土塁 (C)			内堀 (D)			内土塁 (E)			堀幅 B+C +D	残存部長 全 A+B+ C+D+ E
		基底幅	上端	高さ	上幅	下幅	深さ	基底幅	上幅	高さ	上幅	下幅	深さ	基底幅	上幅	高さ		
大木戸	B	—	—	—	5.00	—	2.00	3.00	—	1.70	7.91	2.60	—	—	—	—	15.91	15.91
"	A	4.94	—	—	3.0	0.5~ 0.6	—	5.00	—	1.30	6.92	—	—	5.00	—	—	14.92	24.86
森山	5	—	—	—	6.80	1.00	1.50	6.00	—	—	7.50	2.10	1.40	5.70	4.50	1.30 (0.80)	20.30	26.00
"	14	—	—	—	10.30	1.50	2.20	3.10	—	—	9.00	1.30	1.50	4.60	3.70	1.20	22.40	27.00
"	13	—	—	—	7.60	3.40	1.60	5.60	—	—	7.00	2.60	1.45	—	—	—	20.20	20.20
西大枝	27	5.20	—	—	4.40	1.00	1.40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
"	28	4.25	—	—	5.30	0.90	1.94	5.44	—	—	7.40	1.10	1.86	—	—	—	18.19	22.44
"	29	*	*	*	*	*	*	<4.65>	*	*	6.84	1.24	3.60	—	—	—	—	—
"	26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.40	—	1.50 (0.38)	—	—
"	25	8.20	6.60	1.90	—	—	—	3.00	—	—	11.20	1.80	2.30	—	—	—	—	—
"	24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13.00	(1.80)	2.30	—	—	—	—	—

(注) *…検出できなかったもの、()…想定値、< >…盛土の高さ、一部想定値も含む。

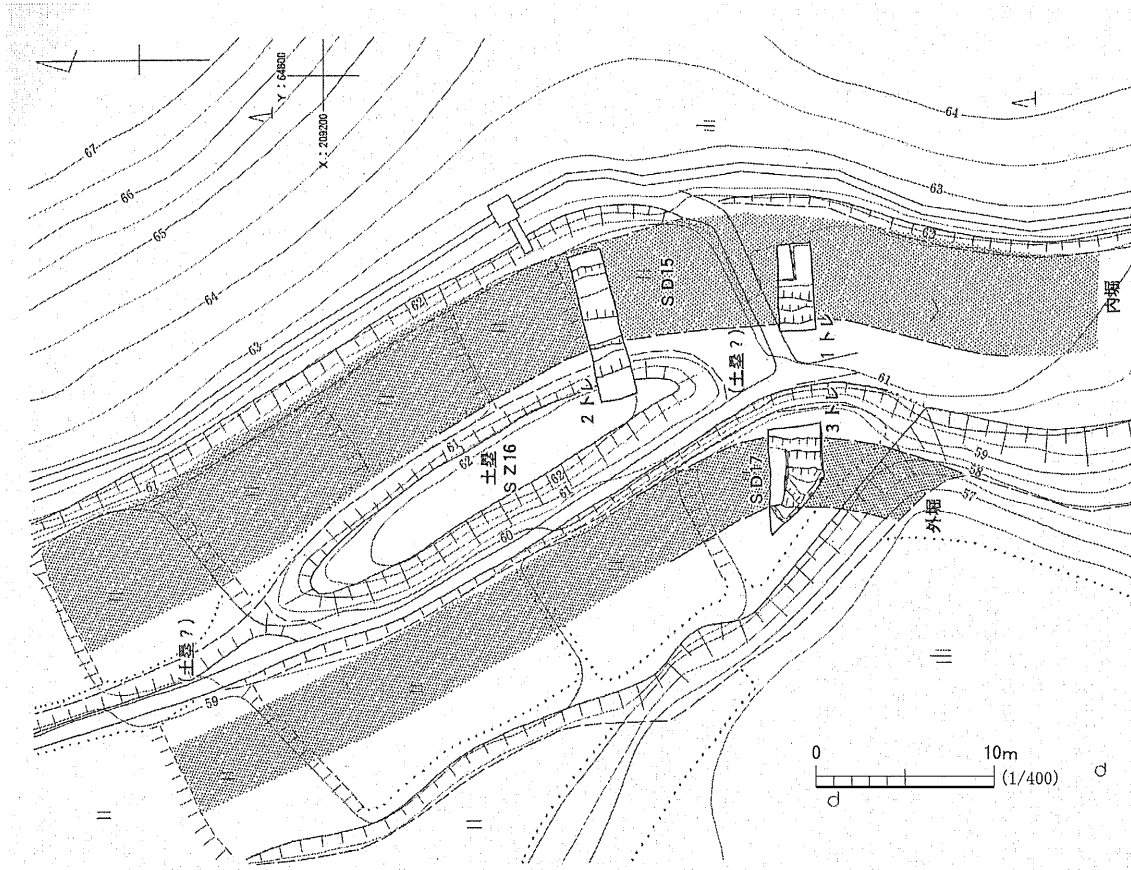


下二重堀地区

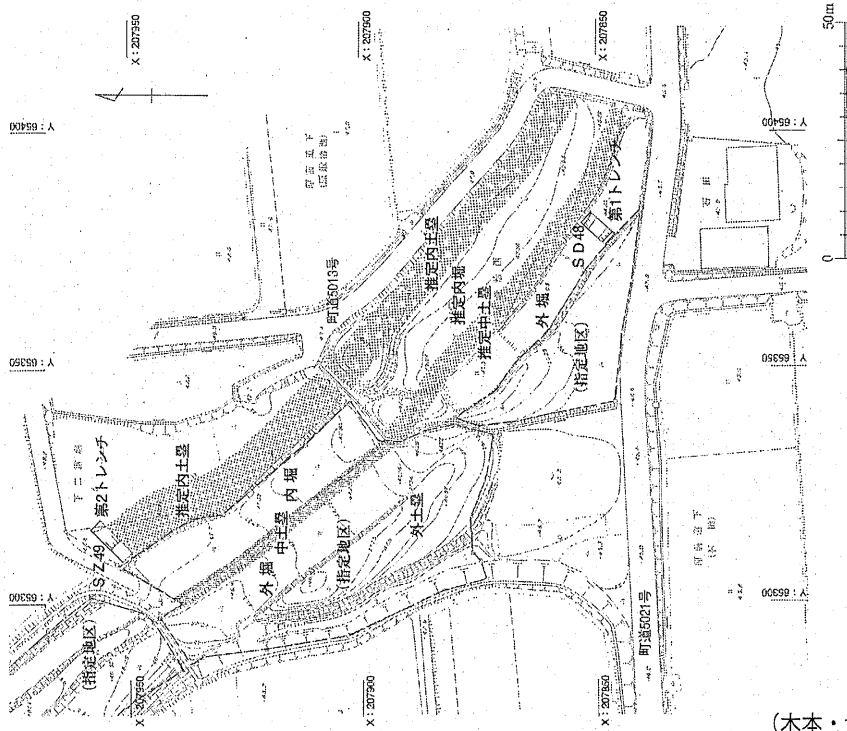
(安田2020を転載し一部加筆)

阿津賀志山防塁遺構図





遠矢崎地区の二重堀が一重になる箇所



下二重堀地区
阿津賀志山防塁遺構図

第102図 第14次調査下二重堀地区・原線治西地区遺構推定図 (縮尺 1/1,500)
(木本・大栗2015を転載し一部加筆)